

カミュと生きて

ヴァンサン・シアノ

行成 望美, 小西 晴美, 村上 直子訳

私は最初、アルベール・カミュの作品、ましてや彼の芝居と出会う運命などなかったのだが、こんな具合にことが進んだ。私はもともと庶民の出で、書き言葉とは無縁な庶民的な環境（周囲には農民や工場労働者が多かった）の中で育ったのだが、公教育のおかげで自分の出身とは違う文化形態を知ることとなり、カミュを発見した。

私とカミュの「出会い」の過程はどのようなものだったか。

- ・思春期に私は『正義の人々』を知った。
- ・成人して間もない頃、私は『反抗的人間』に夢中になった。
- ・教育者として地域の若者に文化を伝えるために、私は彼らに『追放と王国』の中の2つの短篇「客」と「もの言わぬ人々」を翻案して上演することを提案した。
- ・私にはカミュと同じ地中海の血が流れていることに気づき、心を動かされ魅せられて『最初の人間』を翻案した。
- ・好奇心に溢れ怖いもの知らずの演出家である私は、カミュの全劇作にあたる5本の戯曲を主に若い役者を使って上演したいと思った。

まず、最後に挙げた、時間をかけて完成にこぎつけた冒険的な仕事（2009～2014）について紹介し、そのあとで時間をさかのぼることにしよう。

1. カミュの全戯曲を上演する：集団的な挑戦

アルベール・カミュ生誕百年（2013年）が近づくとつれ、私は彼の全戯曲を上演してみたい、若い役者たちとともにこの芸術的冒険を生きてみたいと心の底から感じた。この選択は私には妥当に思えた。カミュの言葉は今日の若者たちの心にも響くものがあると思うからだ。

そもそもカミュは若い頃から演劇に熱中していた。彼は22歳で劇団を立ち上げ、最初の戯曲『アストゥリアスの反抗』を執筆し上演しようとしたが、アルジェでの初演の際、上演禁止になったのである⁽¹⁾。この戯曲はその後一度も上演されておらず、光栄にも私たちが初めて披露することになった。

アルベール・カミュはそれから4本の戯曲しか書いていない（すべてパリで上演された）。もっとも彼は小説からの翻案劇をいくつも上演している。

5本の戯曲はどのようなものだろうか。

以下がその要約である。

『アストゥリアスの反抗』（1936）

アストゥリアスの鉱山で起きた労働者の反乱（スペイン、1934年）を賞賛する若かりしかミュの「集団制作の試み」。

ペベとピラルのカップルがそうであるように、社会的不正に反抗する労働者階級の英雄たちを称えた政治的であると同時に詩的でもあるアンガージュマンの戯曲である。しかし、彼らの犠牲も残忍な軍事的弾圧を妨げることはできない。

『誤解』（1944）

母親と娘が切り盛りしている東ヨーロッパの宿屋。

ある若者がそこに一夜を過ごしに来る。それが彼の最後の夜となる！

実は彼はその家の息子で、若い妻を連れて15年ぶりに⁽²⁾戻って来たのだが、彼は素性を明かさない。母親が気付いてくれることを期待しているのだ。

ところが、母親と娘はひとり旅の泊まり客を殺し、金品を奪うことで生計を立てていた。

残酷さと欲望、宿命と不条理がこの仮借ない悲劇に作用している。カミュはこの芝居が「現代的」悲劇であることを望んでいるが、それは抒情性をもった「スリラー」でもある。

『カリギュラ』(1945)

主人公は歴史上の人物、スエトニウスが描いた若きローマ皇帝カリギュラであるが、カミュの手にかかると「不条理の皇帝」となり、絶対を探求するそのシニシズムと暴力にはとめどがない。ローマの貴族階級であれ、若き詩人にして友人でもあるシピオンであれ、愛人のカエゾニアであれ、カリギュラは楽しげに、また巧みに操り侮辱する。ただ貴族であり政治家であるケレアだけが、忠実な道化エリコンに守られたカリギュラの病的なゲームに終止符をうつために鋭敏な策を練る。

『戒厳令』(1948)

コロス（合唱団）が町に災厄を告げる。

実際、悪のカップルが町を掌握する。バストとその秘書（死）である。

それ以来、ありとあらゆる情念、下劣さ、恐怖、裏切りが表面化する。総督は町を引き渡し、判事は妻と娘を否認し、ニヒリストのナダは敵に協力する。若き主人公ディエゴですらたじろぐことになるが、やがて彼は立ち直り、抵抗し、連帯の高まりを生み出し、町を救う。しかし、それは犠牲をとまなう。ディエゴの婚約者ヴィクトリアは命を落としそうになり、ディエゴは彼女を失うことになるからだ。

『正義の人々』（1949）

カミュは再び歴史から着想を得る。1905年、5人の若き革命家のグループがロシア皇帝の伯父にあたる大公の暗殺を企てる。キャリアエフ（愛称ヤネック）は爆弾を投げようとしたとき、ふたりの子ども——大公の甥と姪——を目にして、無垢な者たちを殺すことを拒む。彼は妥協なき革命家のステパンから厳しい非難を受けるが、恋人のドーラは彼をかばう。彼が爆弾を投げることを断念した結果、グループは反抗という行動、人間の正義、個人の幸福について話し合うことになる。二度目の試みは成功する。そのためにヤネックは死刑を宣告され、ドーラは彼の遺志を継ぐことを望む。

ボーム・ドゥ・ヴニーズ（演劇の聖地のひとつと言うべきアヴィニョンの北35キロ）にあるわれわれの劇団 TRAC（Théâtre Rural d'Animation Culturelle 地方文化振興劇団）は、プロヴァンスの村々で50回ほど公演した。この実験はまだ続いている。2014年10月、われわれはスペイン（バスクとアストゥリアス）に招かれ、『アストゥリアスの反抗』のツアーをするからだ。

では時間をさかのぼることにしよう。

2. 最初の情緒的衝撃：『正義の人々』

15歳の頃、先生たちがわれわれに最上級生たちが上演する芝居を見に行くようすすめた。アルペール・カミュとかいう人の『正義の人々』である。人民を隷属から救うために専制君主に暗殺をしかける若い革命家の物語で、庶民階級の少年だった私は大いに感動した。その主義主張は「正義」にかなっていると私には思えたのだ。馬車に無垢な子どもがふたり乗っていたという理由で専制君主に爆弾を投げるのを拒んだ若いヤネックを通してカミュが提起した大きな問題に私の心はどれほど揺さぶられたことか。「目的は手段を正当化するか」という根源的問題の哲学的政治的大きさを理解できなかったとしても、私は若

い主人公のヒューマニズムと犠牲に感じ入ったのである。

3. 人間と世界に関する考察：『反抗的人間』

最終学年になっても、私はカミュをほとんど読んでいなかった（実を言うと、私は哲学よりもスポーツに興味があったのだ）。だが、あるタイトルが私の好奇心を刺激した。『反抗的人間』である。包み隠さず言うと、1968年5月のフランスで起きた若者の反抗は私の心に刻み込まれていて、それに続く何年かの間、私は自由奔放な理想に直感的に惹かれていたのだ。だから、私はカミュの本を読む中で、人間と世界の進化に必要な反抗の感情の基礎をみつけていた。

おそらく、この若さゆえの心の躍動は、革命的ロマンティズムにすぎなかっただろうが、私の家族の具体的な生活条件や社会的不正の現実に根ざしたものでもあった。

この社会的な考察と平行して、私は地方公共団体で働きはじめ文化事業に従事した。そこでもまた、私は所謂エリート文化に対抗する庶民文化を守りたいと思っていた。根本にある思想は、文化的表現や芸術的創造性は支配階級あるいは国民のうちのある階層に独占されてはならないということであった。

当時は地方の環境は極端なまでに不利なものであった（文化的砂漠という言葉が口にされた）。だから、私は村に残り、そこの人々と芝居をしようと決心した。私が演劇を選んだこと、演劇を楽しんでいることは、おそらく子どもの頃の農民社会の口承の伝統と何か関係があるのだろう（私の先祖は読み書きができなかった）。

4. 文化的教育と暴力：「もの言わぬ人々」と「客」

時は経ち、経済的社会的コンテクストは激化する都市化へと進化する。そ

して私は貧しい地域の若者たちに演劇を教え文化を広める立場になった。「カミュとアルジェリア」というテーマで何かしてみようと提案したのは、その枠組みの中でのことだ。

一方ではカミュが子供時代と青年時代を1961年の独立以前の「フランス領」アルジェリアで過ごしたこと、もう一方ではフランスの町の多くの地域ではアルジェリア出身の住人の割合が非常に高いことをわかっていただきたい。

時折、強く、さらには暴力的でさえある緊張が若者たちとの間に生まれたのが、カミュの作品をめぐる彼らと一緒に考えるのは面白かった。客観的でヒューマニズムにあふれ節度ある視点を保ちつつ、アルジェリアの人々とフランスの人々とを和解させようとしたのは他でもないカミュだったからだ。私たちは大部分が落ちこぼれの生徒である若者たちと共にカミュの短編2作を上演するのに成功した。

劇団員たちは日夜、ルールマラン村の学校の庭で、個人的・社会的・政治的矛盾と暴力の中に捕われたカミュの登場人物たちを演じようと力を尽くした。翻案作業がすすむにつれて、若者たちはカミュの思想の歩みを感じ取ることができるようになった。彼らはまた演劇という作業がもたらす異化効果のおかげで、登場人物の台詞を自分のものにして深く考えるという責任を果たした。「もの言わぬ人々」では、彼らはストライキに失敗し心理的社会的葛藤の中に引き裂かれている樽工場の工員になった（アルベール・カミュの叔父はアルジェの樽工場で働いていた！）。

「客」では、彼らは植民地アルジェリアの緊張のただ中にいた。ある「平和主義」のフランス人小学校教員が、反逆の闘士のアラブ人の囚人⁽³⁾の見張りと呼き添いを強要される。ふたりはどちらも歴史が作り出す不条理な状況に否応なく捕われているのである。

若者たちの大半がマグレブ⁽⁴⁾出身であることを思えば、どれほど激しい議論が行なわれたか、それによってどれほど考えが豊かになったか想像できるだろう。

カミュのテキストと歴史的な文脈の両方から、われわれはアルベール・カミュが1953年にアテネの講演で述べた問題にただちに直面することとなった。カミュは「(……) 悲劇において対立する力はどちらも同じように正当であり、同じように理にかなっている」と語ったのだ。

カミュの言葉は若者たちの胸に響いたであろうか。作品とのこのような出会いがどれほどの影響力をもつのかは計りがたい。

しかし、若者たちはおそらくカミュの誠実さに心を打たれたであろう。カミュはこう書いているからだ。

美があり、屈辱を受けた人々がいる。私はその企てがどれほど困難であろうと、そのどちらに対しても忠実でありたい。

5. 「地中海的」アイデンティティ：『最初の人間』

その直後に、私は「カミュ的」な実験を続けようとして、今度はカミュの未完成の小説『最初の人間』の翻案を試みた。『最初の人間』はカミュの死の34年後に出版された作品で、ページを追うごとに、彼の分身であるジャック・コルムリイの少年期と人生を描いている。この小説を読んで、私は動転した。学校が主要な役割を果たした「熱気溢れる」貧困の中に、「地中海的」な私たちの少年期との類似を見つけたからだ。

だが、カミュに近い人たちの前でこの芝居を上演するのは、たやすいことではなかった。この小説がもつ強度の自伝的コノテーションが、小説を翻案するにあたって面倒な問題を生じさせたのだ。芸術的な創造性、特に舞台装置と原色を使った衣装は、何人かの観客を戸惑わせた。われわれはテキストにとことん忠実でありながら、視覚の中に異化効果を生み出したかったのだが、そのことも、またカミュや彼の母親や祖母や叔父とみなされる登場人物の「解釈」も、非難的となった。舞台の上に見えるものと著者に近い人々が語る思い

出とのずれは乗り越えがたいものがあつた。「見るとはつねに、実際に見えている以上のものを見ることなのだ」というメルロ＝ポンティの言葉を証明する好例と言えらう。

「舞台はこの世で私が幸せでいられる場所のひとつだ」とカミュは書いている。結論として、全ての劇団員にとってこのようにカミュの作品と思想を生きたことは実に幸せなことだったと断言していいだろう。

光溢れるこの思想、正午の思想が、稽古中も公演中もずっとわれわれを照らしてくれたのだ。

最後に「カミュと幸福」に関する弘樹の本⁽⁵⁾に目配せをするために、こう言っておこう。「幸福な役者を想像しなければならない。」

後記

上に訳したのは、2014年12月18日に関西学院大学文学部で行なわれたヴァンサン・シアノ氏の講演会の原稿である。シアノ氏はカミュが書いた5本の戯曲全てを上演したおそらく世界でただひとりの演出家である。

シアノ氏は1953年イタリアに生まれ、9歳のときフランスに移住した。17歳から地方公共団体で演劇を通して地域の若者の教育と文化の活性化に努め、1979年にアヴィニョンの北35キロにある小さな村ボーム・ドゥ・ヴニーズにTRAC (Théâtre Rural d'Animation Culturelle 地方文化振興劇団) を設立、自らも役者として活動するとともに、地域の若者を中心にアマチュアの役者を指導し、フランスのみならず世界24カ国をまわり、100本以上の芝居を上演している。

私がシアノ氏の知遇を得たのは、2013年、カミュ生誕100年を記念してスリジー・ラ・サルで開かれた国際カミュ研究会においてである。このときシアノ氏が上演したカミュの戯曲の抜粋をDVDで見た私は、『戒厳令』に登場する独裁者ベストを女性に変えてSMの女王風の衣装を着せたり、ベスト

の秘書に AKB 48 風の制服を着せたり、『カリギュラ』のエリコンを大男と小男ふたりに二人羽織状態で演じさせたりする大胆かつ斬新な演出に魅せられた。

帰国後も、私はシアノ氏とメールで連絡をとりあい、2014年3月に兵庫県立ピッコロ演劇学校の卒業公演で『戒厳令』の翻案「風のやんだ日に」を上演し、ベスト役を演じたことなどから、親交を深めることになった。

その後、2014年12月20・21日に私が書いた戯曲『マイ・スウィート・スウィート・ホーム』を大阪・船場サザンシアターで上演し、私自身も出演するという話をした際、シアノ氏が「じゃあ見に行く」と言ってきたので、「じゃあおいで」と答えたことが、シアノ氏来日に、さらには関西学院大学での講演につながった。まさに瓢箪から駒が出たというところである。

この翻訳は私の指導している院生の行成望美さんと、聴講生の小西晴美さん、村上直子さんの手によるものである。もし見るべきところがあれば、それは彼女たちの努力の賜物であり、逆にもし誤訳や事実誤認があれば、それは監修者たる私が責めを負うものであることを書き添えて筆を置きたい。

とうとうら
東浦弘樹（文学部教授）

訳注

- (1) 厳密に言えば、アルジェ当局からの妨害にあい上演を断念しただけで、上映禁止にはなっていない。
- (2) カミュのテキストでは「20年ぶり」となっている。
- (3) カミュのテキストではアラブ人の囚人は小麦の貸し借りのトラブルで従弟を殺したことになっており、アルジェリア独立運動の闘士とは書かれていない。
- (4) モロッコ、アルジェリア、チュニジアの三国を指す。
- (5) ヴァンサン・シアノ氏の講演会を企画した東浦弘樹の本 *La Quête et les expressions du bonheur dans l'œuvre d'Albert Camus* (Eurédit, 2004) を指す。この本の最後に東浦は「幸せなシーシュポスを想像しなければならない」というカミュの『シーシュポスの神話』の最後の文をもじって、「幸せなカミュを想像しなければならない」と書いている。

ヴァンサン・シアノ（演出家）

行成望美（文学研究科博士課程前期課程）

小西晴美（聴講生）

村上直子（聴講生）